

今回のインドが、自分にとって十三回目の緊急医療活動です。クルドやルワンダの難民支援、ロシアやインドネシア、中国の地震や洪水被害など出かけた場所には様々ですが、大きな国ほどプライドがあるのか、救援だと説明しても断られることもあります。

一九九五年のサハラ地震では、ロシア政府から「北方領土が絡むので日本の援助は要らない」と言われました。しかし、医薬品が

三宅和々さんが語る

領の言うことなんか気にするな。おれたちサハラが歓迎する」と出迎えてくれた。うれしかったですね。おかげで、十三回の医薬品を運び入れることができました。

九八年の中国・河北省地震では、活動の許可を受けながら五日間も北京でストップがかかりました。「持参した医薬品が無駄になっ てしまう」と言っても、対応の役人は「被災地の近くに軍事基地があり、通行は許可できない」というばかり。結局、モンゴルを經由してから現地に向かわざるを得ませんでした。

● AMDAインド地震救援団長

被災地の喜び確信 頭を下げて現地へ

足りないという現地情報を聞いていたので、「何とか薬だけでも補給させてほしい」と頼み込みました。何度も頭を下げ、やっと許可をもらって現地に入ると、市民が「エリツイン(大統

空券を使っても現地に向かうのですが、到着すると、荷物に税金を掛けようとする国もある。「救援用の医薬品だから無税にしてほしい」と、空港で掛け合うことにも慣れました。

我々の活動は、募金や物資の寄付で成り立っています。自分たちは格安航

そうまでして救援に

行くのは、国としての建前と被災地のニーズとは全く違うことを、経験で分かっているからです。「医者や薬は

十分だ」と言われても、場所によっては言葉通

りではありません。きつと喜んでもらえると

いう確信があるから、

なんとかして行こうとするのです。(つづく)



患者さんに喜ばれるのが一番うれしいと話す三宅医師(中央、アフガニスタンで)